第３講　共通テスト第１日程　第２問

第２問

次の文章は、加能作次郎（かのうさくじろう）「羽織と時計」（一九一八年発表）の一節である。「私」と同じ出版社で働くW君は、妻子と従妹（いとこ）と暮らしていたが生活は苦しかった。そのW君が病で休職している期間、「私」は何度か彼を訪れ、同僚から集めた見舞金を届けたことがある。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い（**問１〜６**）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　50）

春になって、陽気がだんだん暖かになると、W君の病気も次第に快（よ）くなって、五月の末には、再び出勤することが出来るようになった。

『君の家の紋（注1）は何かね？』

彼が久し振りに出勤した最初の日に、W君は突然私に尋ねた。私は不審に思いながら答えた。

『（注2）円（まる）に横モッコです。平凡なありふれた紋です。何ですか？』

『いや、実はね。僕も長い間休んで居て、君に少（すくな）からぬ世話になったから、ほんのお礼の印に（注3）羽二重（はぶたえ）を（注4）一反（いったん）お上げしようと思っているんだが、同じことなら羽織にでもなるように紋を抜いた（注5）方がよいと思ってね。どうだね、其方（そのほう）がよかろうね。』とW君は言った。

W君の郷里は羽二重の産地で、彼の親類に織元（おりもと）があるので、そこから安く、実費で

メモ欄

分けて貰(もら)うので、外にも序(ついで)があるから、そこから直接に京都へ染めにやることにしてあるとのことであった。

『染(そめ)は京都でなくちゃ駄目だからね。』とW君は独りで首肯(うなず)いて、『じゃ早速言ってやろう。』

私は辞退する(ア)術(すべ)もなかった。

一ケ月あまり経(た)って、染め上(あが)って来た。W君は自分でそれを持って私の下宿を訪れて呉(く)れた。私は早速W君と連れだって、呉服屋へ行って裏地を買って羽織に縫って貰った。

貧乏な私は其時(そのとき)まで礼服というものを一枚も持たなかった。羽二重の紋付(もんつき)の羽織というものを、その時始めて着たのであるが、今でもそれが私の持物(もちもの)の中で最も貴重なものの一つとなって居る。

『ほんとにいい羽織ですこと、あなたの様な貧乏人が、こんな羽織をもって居なさるのが不思議な位ですわね。』

妻は、私がその羽織を着る機会のある毎(ごと)にそう言った。私はW君から貰ったのだということを、妙な羽目からつい(イ)言いはぐれて了(しま)って、今だに妻に打ち明けてないのであった。妻が私が結婚の折に特に拵(こしら)えたものと信じて居るのだ。下に着る着物でも袴(はかま)でも、その羽織とは全く不調和な粗末なものばかりしか私は持って居ないので、

『よくそれでも羽織だけ飛び離れていいものをお拵えになりましたわね。』と妻は言うのであった。

『そりゃ礼服だからな。これ一枚あれば下にどんなものを着て居ても、兎(と)に角(かく)礼服と

メモ欄

して何処(どこ)へでも出られるからな。』私は A<u>擽(くす)ぐられるような思(おも)い</u>をしながら、そんなことを言って誤魔化(ごまか)して居た。

『これで袴だけ（注6）仙台平(せんだいひら)か何かのがあれば揃(そろ)うのですけれどね。どうにかして袴だけいいのをお拵えなさいよ。これじゃ羽織が泣きますわ。こんなぼとぼとしたセル（注7）の袴じゃ、折角(せっかく)のいい羽織がちっとも引き立たないじゃありませんか。』

妻はいかにも惜しそうにそう言い言いした。

私もそうは思わないではないが、今だにその余裕がないのであった。私はこの羽織を着る毎にW君のことを思い出さずに居なかった。

その後、社に改革があって、私が雑誌を一人でやることになり、W君は書籍の出版の方に廻(まわ)ることになった。そして翌年の春、私は他にいい口があったので、その方へ転ずることになった。

W君は私の将来を祝し、送別会をする代(かわ)りだといって、自ら奔走して社の同人（注8）達(たち)から二十円ばかり（注9）醵金(きょきん)をして、私に記念品を贈ることにして呉れた。私は時計を持って居なかったので、自分から望んで懐中時計を買って貰った。

『贈××君。××社同人。』

こう銀側の蓋の裏に小さく刻まれてあった。

この処置について、社の同人の中には、内々不平を抱いたものもあったそうだ。まだ二年足らずしか居ないものに、記念品を贈るなどということは曾(かつ)て例のないことで、これはW君が、自分の病気の際に私が奔走して見舞金を贈ったので、その時の私の厚意に酬(むく)いようとする個人的の感情から企てたことだといってW君を非難するものも

メモ欄

あったそうだ。また中には、『あれはW君が罷める時にも、そんな風なことをして貰いたいからだよ。』と卑しい邪推をして皮肉を言ったものもあったそうだ。

私は後でそんなことを耳にして非常に不快を感じた。そしてW君に対して気の毒でならなかった。そういう非難を受けてまでも（それはW君自身予想しなかったことであろうが）私の為に奔走して呉れたW君の厚い情誼(注10)を思いやると、私は涙ぐましいほど感謝の念に打たれるのであった。それと同時に、その一種の恩恵に対して、常に或る重い圧迫を感ぜざるを得なかった。

羽織と時計――。私の身についたものの中で最も高価なものが、二つともW君から贈られたものだ。この意識が、今でも私の心に、感謝の念と共に、B何だかやましいような気恥しいような、訳のわからぬ一種の重苦しい感情を起させるのである。

××社を出てから以後、私は一度もW君と会わなかった。W君は、その後一年あまりして、病気が再発して、遂に社を辞し、いくらかの金を融通して来て、電車通りに小さなパン菓子屋を始めたこと、自分は寝たきりで、店は主に従妹が支配して居て、それでやっと生活して居るということなどを、私は或る日途中で××社の人に遇った時に聞いた。私は××社を辞した後、或る文学雑誌の編輯に携って、文壇の方と接触する様になり、交友の範囲もおのずから違って行き、仕事も忙しかったので、一度見舞旁々訪わねばならぬと思いながら、自然と遠ざかって了った。その中私も結婚をしたり、子が出来たりして、境遇も次第に前と異って来て、一層(ウ)足が遠くなった。

メモ欄

偶々(たまたま)思い出しても、久しく無沙汰をして居ただけそれだけ、そしてそれに対して一種の自責を感ずれば感ずるほど、妙に改まった気持(きもち)になって、つい億劫(おっくう)になるのであった。

羽織と時計――併(しか)し本当を言えば、この二つが、W君と私とを遠ざけたようなものであった。これがなかったなら、私はもっと素直な自由な気持になって、時々W君を訪れることが出来たであろうと、今になって思われる。何故(なぜ)というに、私はこの二個の物品を持って居るので、常にW君から恩恵的債務を負うて居るように感ぜられたからである。この債務に対する自意識は、私をして不思議にW君の家の敷居を高く思わせた。而(しか)も不思議なことに、C<u>私はW君よりも、彼の妻君(さいくん)の眼を恐れた。</u>私が時計を帯にはさんで行くとする、『あの時計は、(注11)良人(うち)が世話して進(あ)げたのだ。』斯(こ)う妻君の眼が言う。私が羽織を着て行く、『あああの羽織は、良人が進げたのだ。』斯う妻君の眼が言う。もし二つとも身につけて行かないならば、『あの人は羽織や時計をどうしただろう。』斯う妻君の眼が言うように空想されるのであった。どうしてそんな考(かんがえ)が起(おこ)るのか分(わか)らない。或(あるい)は私自身の中に、そういう卑しい邪推深い性情がある為であろう。が、いつでもW君を訪れようと思いつく毎に、妙にその厭(いや)な考が私を引き止めるのであった。そればかりではない、こうして無沙汰を続ければ続けるほど、私はW君の妻君に対して更に恐れを抱くのであった。

『〇〇さんて方は随分薄情な方ね、あれきり一度も来なさらない。こうして貴郎(あなた)が病気で寝て居らっしゃるのを知らないんでしょうか、見舞に一度も来て下さらない。』

斯う彼女が彼女の良人(おっと)に向(むか)って私を責めて居そうである。その言葉には、あんなに、羽織や時計などを進げたりして、こちらでは尽(つく)すだけのことは尽してあるのに、とい

メモ欄

う意味を、彼女は含めて居るのである。

そんなことを思うと迚も行く気にはなれなかった。こちらから出て行って、妻君のそういう考をなくする様に努めるよりも、私は逃げよう逃げようとした。私は何か偶然の機会で妻君なり従妹なりと、途中ででも遇わんことを願った。そうしたら、『W君はお変りありませんか、相変らず元気で××社へ行っていらっしゃいますか？』としらばくれて尋ねる、すると、疾うに社をやめ、病気で寝て居ると、相手の人は答えるに違いない。

『おやおや！　一寸も知りませんでした。それはいけませんね。どうぞよろしく言って下さい。近いうちに御見舞に上りますから。』

こう言って分れよう。そしてそれから二三日置いて、何か手土産を、そうだ、かなり立派なものを持って見舞に行こう、そうするとそれから後は、心易く往来出来るだろう――。

そんなことを思いながら、三年四年と月日が流れるように経って行った。今年の新緑の頃、子供を連れて郊外へ散歩に行った時に、D私は少し遠廻りして、W君の家の前を通り、原っぱで子供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に餡パンを買わせたが、実はその折陰ながら家の様子を窺い、うまく行けば、全く偶然の様に、妻君なり従妹なりに遇おうという微かな期待をもって居た為めであった。私は電車の線路を挟んで向側の人道に立って店の様子をそれとなく注視して居たが、出て来た人は、妻君でも従妹でもなく、全く見知らぬ、(注12)下女の様な女だった。私は若しや家が間違っては居ないか、または代が変ってでも居るのではないかと、屋根看板をよく注意して

メモ欄

見たが、以前××社の人から聞いたと同じく、××堂Ｗ――とあった。たしかにＷ君の店に相違なかった。それ以来、私はまだ一度も其店の前を通ったこともなかった。

（注）
1 紋――家、氏族のしるしとして定まっている図柄。
2 円に横モッコ――紋の図案の一つ。
3 羽二重――上質な絹織物。つやがあり、肌ざわりがいい。
4 一反――布類の長さの単位。長さ一〇メートル幅三六センチ以上が一反の規格で、成人一人分の着物となる。
5 紋を抜いた――「紋の図柄を染め抜いた」という意味。
6 仙台平――袴に用いる高級絹織物の一種。
7 セル――和服用の毛織物の一種。
8 同人――仲間。
9 醵金――何かをするために金銭を出し合うこと。
10 情誼――人とつきあう上での人情や情愛。
11 良人――夫。
12 下女――雑事をさせるために雇った女性のこと。当時の呼称。

メモ欄

問１　傍線部(ア)〜(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［１］〜［３］。

(ア)　術もなかった　［１］
① 理由もなかった
② 手立てもなかった
③ 義理もなかった
④ 気持ちもなかった
⑤ はずもなかった

(イ)　言いはぐれて　［２］
① 言う必要を感じないで
② 言う機会を逃して
③ 言うのを忘れて
④ 言う気になれなくて
⑤ 言うべきでないと思って

(ウ)　足が遠くなった　［３］
① 訪れることがなくなった
② 時間がかかるようになった
③ 会う理由がなくなった
④ 行き来が不便になった
⑤ 思い出さなくなった

問２　傍線部Ａ「擽ぐられるような思」とあるが、それはどのような気持ちか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［４］。

① 自分たちの結婚に際して羽織を新調したと思い込んで発言している妻に対する、笑い出したいような気持ち。
② 上等な羽織を持っていることを自慢に思いつつ、妻に事実を知られた場合を想像して、不安になっている気持ち。
③ 妻に羽織をほめられたうれしさと、本当のことを告げていない後ろめたさとが入り混じった、落ち着かない気持ち。
④ 妻が自分の服装に関心を寄せてくれることをうれしく感じつつも、羽織だけほめることを物足りなく思う気持ち。
⑤ 羽織はＷ君からもらったものだと妻に打ち明けてみたい衝動と、自分を侮っている妻への不満とがせめぎ合う気持ち。

問３　傍線部Ｂ「何だかやましいような気恥しいような、訳のわからぬ一種の重苦しい感情」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［5］。

① Ｗ君が手を尽くして贈ってくれた品物は、いずれも自分には到底釣り合わないほど立派なものに思え、自分を厚遇しようとするＷ君の熱意を過剰なものに感じてとまどっている。

② Ｗ君の見繕ってくれた羽織はもちろん、自ら希望した時計にも実はさしたる必要を感じていなかったのに、Ｗ君がその贈り物をするために評判を落としたことを、申し訳なくももったいなくも感じている。

③ Ｗ君が羽織を贈ってくれたことに味をしめ、続いて時計までも希望し、高価な品々をやすやすと手に入れてしまった欲の深さを恥じており、Ｗ君へ向けられた批判をそのまま自分にも向けられたものと受け取っている。

④ 立派な羽織と時計とによって一人前の体裁を取り繕うことができたものの、それらを自分の力では手に入れられなかったことを情けなく感じており、Ｗ君の厚意にも自分へ向けられた哀れみを感じ取っている。

⑤ 頼んだわけでもないのに自分のために奔走してくれるＷ君に対する周囲の批判を耳にするたびに、Ｗ君に対する申し訳なさを感じたが、同時にその厚意には見返りを期待する底意をも察知している。

問４　傍線部Ｃ「私はＷ君よりも、彼の妻君の眼を恐れた」とあるが、「私」が「妻君の眼」を気にするのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 「私」に厚意をもって接してくれたＷ君が退社後に寝たきりで生活苦に陥っていることを考えると、見舞に駆けつけなくてはいけないと思う一方で、「私」の転職後はＷ君と久しく疎遠になってしまい、その間看病を続けた妻君に自分の冷たさを責められるのではないかと悩んでいるから。

② Ｗ君が退社した後慣れないパン菓子屋を始めるほど家計が苦しくなったことを知り、「私」が彼の恩義に酬いる番だと思う一方で、転職後にさほど家計も潤わずＷ君を経済的に助けられないことを考えると、Ｗ君を家庭で支える妻君には申し訳ないことをしていると感じているから。

③ 退職後に病で苦労しているＷ君のことを思うと、「私」に対するＷ君の恩義は一生忘れてはいけないと思う一方で、忙しい日常生活にかまけてＷ君のことをつい忘れてしまうふがいなさを感じたまま見舞に出かけると、妻君に偽善的な態度を指摘されるのではないかという怖さを感じているから。

④ 自分を友人として信頼し苦しい状況にあって頼りにもしているだろうＷ君のことを想像すると、見舞に行きたいという気持ちが募る一方で、かつてＷ君の示した厚意に酬いていないことを内心やましく思わざるを得ず、妻君の前では卑屈にへりくだらねばならないことを疎ましくも感じているから。

⑤ Ｗ君が「私」を立派な人間と評価してくれたことに感謝の気持ちを持っているため、Ｗ君の窮状を救いたいという思いが募る一方で、自分だけが幸せになっているのにＷ君を訪れなかったことを反省すればするほど、苦労する妻君には顔を合わせられないと悩んでいるから。

問５　傍線部Ｄ「私は少し遠廻りして、Ｗ君の家の前を通り、原っぱで子供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に餡パンを買わせた」とあるが、この「私」の行動の説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は　7　。

① Ｗ君の家族に対する罪悪感を募らせるあまり、自分たち家族の暮らし向きが好転したさまを見せることがためらわれて、かつてのような質素な生活を演出しようと作為的な振る舞いに及んでいる。

② Ｗ君と疎遠になってしまった後悔にさいなまれてはいるものの、それを妻に率直に打ち明け相談することも今更できず、逆にその悩みを悟られまいとして妻にまで虚勢を張るはめになっている。

③ 家族を犠牲にしてまで自分を厚遇してくれたＷ君に酬いるためのふさわしい方法がわからず、せめて店で買い物をすることによって、かつての厚意に少しでも応えることができればと考えている。

④ Ｗ君の家族との間柄がこじれてしまったことが気がかりでならず、どうにかしてその誤解を解こうとして稚拙な振る舞いに及ぶばかりか、身勝手な思いに事情を知らない自分の家族まで付き合わせている。

⑤ 偶然を装わなければＷ君と会えないとまで思っていたが、これまで事情を誤魔化してきたために、今更妻に本当のことを打ち明けることもできず、回りくどいやり方で様子を窺う機会を作ろうとしている。

問６　次に示す**【資料】**は、この文章（加能作次郎「羽織と時計」）が発表された当時、新聞紙上に掲載された批評（評者は宮島新三郎、原文の仮名遣いを改めてある）の一部である。これを踏まえた上で、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料】

今までの氏は生活の種々相を様々な方面から多角的に描破（注1）して、其処（そこ）から或るものを浮き上（あが）らせようとした点があったし、又そうすることに依（よ）って作品の効果を強大にするという長所を示していたように思う。見た儘（まま）、有りの儘を刻明に描写する――其処に氏の有する大きな強味がある。由来（注2）氏はライフの一点だけを覘（ねら）って作をするというような所謂（いわゆる）『小話（こばなし）』作家の面影は有（も）っていなかった。

それが『羽織と時計』になると、作者が本当の泣き笑いの悲痛な人生を描こうとしたものか、それとも単に羽織と時計に伴う思い出を中心にして、ある一つの興味ある覘いを、否一つのおちを物語ってでもやろうとしたのか分（わか）らない程謂（い）う所の小話臭味の多過ぎた嫌いがある。若（も）し此（この）作品から小話臭味を取去（とり）ったら、即（すなわ）ち羽織と時計とに作者が関心し過ぎなかったら、そして飽くまでも『私』の見たW君の生活、W君の病気、それに伴う陰鬱な、悲惨な境遇を如実に描いたなら、一層感銘の深い作品になったろうと思われる。

羽織と時計とに執し過ぎた（注3）ことは、この作品をユーモラスなものにする助けとはなったが、作品の効果を増す力にはなって居ない。私は寧（むし）ろ忠実なる生活の再現者としての加能氏に多くの尊敬を払っている。

宮島新三郎「師走文壇の一瞥（いちべつ）」（『時事新報』一九一八年一二月七日）

（注）
1　描破――あまさず描きつくすこと。
2　由来――元来、もともと。
3　執し過ぎた――「執着し過ぎた」という意味。

(ⅰ) **【資料】**の二重傍線部に「羽織と時計とに執し過ぎたことは、この作品をユーモラスなものにする助けとはなったが、作品の効果を増す力にはなって居ない。」とあるが、それはどのようなことか。評者の意見の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 多くの挿話からW君の姿を浮かび上がらせようとして、W君の描き方に予期せぬぶれが生じている。
② 実際の出来事を忠実に再現しようと意識しすぎた結果、W君の悲痛な思いに寄り添えていない。
③ 強い印象を残した思い出の品への愛着が強かったために、W君の一面だけを取り上げ美化している。
④ 挿話の巧みなまとまりにこだわったため、W君の生活や境遇の描き方が断片的なものになっている。

(ⅱ) **【資料】**の評者が着目する「羽織と時計」は、表題に用いられるほかに、「羽織と時計――」という表現として本文中にも用いられている(60行目、74行目)。この繰り返しに注目し、評者とは異なる見解を提示した内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 「羽織と時計――」という表現がそれぞれ異なる状況において自問自答のように繰り返されることで、かつてのようにはW君を信頼できなくなっていく「私」の動揺が描かれることを重視すべきだ。
② 複雑な人間関係に耐えられず生活の破綻を招いてしまったW君のつたなさが、「羽織と時計――」という余韻を含んだ表現で哀惜の思いをこめて回顧されていることを重視すべきだ。
③ 「私」の境遇の変化にかかわらず繰り返し用いられる「羽織と時計――」という表現が、好意をもって接していた「私」に必死で応えようとするW君の思いの純粋さを想起させることを重視すべきだ。
④ 「羽織と時計――」という表現の繰り返しによって、W君の厚意が皮肉にも自分をかえって遠ざけることになった経緯について、「私」が切ない心中を吐露していることを重視すべきだ。

■ 共通テスト第１日程

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第２問（50）	1	1	2	3
		2	2	3
		3	1	3
	2	4	3	6
	3	5	1	7
	4	6	1	8
	5	7	5	8
	6	8	4	6
		9	4	6